

「ぶどうのつどいをとおして」

～子どもたちの考える感謝の気持ちと保育士の思い～

楽只保育所 高井 悠之

5歳児クラスぶどうぐみ、32名の子どもたちが、仲間という言葉を知り、「32人揃って、ぶどう組のなかまなんだ。」と仲間意識が大きく芽生え、「32人いれば、大丈夫。」と力を合わせて、様々な行事や活動に取り組んできた。そんな中、ある絵本をきっかけに「生きる事」について子どもたちなりに考えることになった。会話の中で広がっていく子どもの世界と作り出していく活動が『ぶどうのつどい』という行事になった。興味を持つ事から始まり、探究心、意欲、協調性など様々な子どもの姿が見られ、一つ一つの活動の中で子どもの強い思いが感じられる活動となった。また、保育士と保護者が子どもの思いに寄り添い、主体的に受け止めていく中で子どもたちがより一層、興味を深めて、活動に意欲的に参加する姿に繋がったと感じる。この『ぶどうのつどい』の活動を振り返り、考察していく。

I、楽只保育所の概要

楽只保育所は北区に位置する乳幼併設の市営保育所である。昨年度より、元船岡乳児保育所が分園となり、一つの保育所として定員 210 名で運営している。乳幼児の子どもの就学前の教育充実と心身の全面的な発達を願い、将来社会の中で自立していける人格形成の基盤作りの場として、設立。視覚障害児施設や肢体不自由児施設が近くにあり、定期的に情報交換を行い連携を深めている。楽只学区は「人権を大事にするまち」として人と人とのつながりを大切にしている。楽只保育所も子ども一人ひとりの人権を守り、一人ひとりの育ちを大切に、家庭支援の視点を持ちながら保育を進めていくと共に、地域に根差し、地域に開かれた保育所づくりを目指している。また、近くには船岡山や楽只公園、大徳寺などがあり、たくさんの自然に触れる事で季節の移り変わりを感じながら、京都の文化や歴史にも触れる事の出来る環境である。

II、ぶどうのつどいを取り組むにあたって

(1) 初めての取り組み

4 月、年間行事予定を立てる際に年長児(ぶどう組)としての取り組みが何か出来たらと、担任間で話ながら計画を立ててきた。今までにない取り組みだったので、所長にも相談しながらどのような取り組みが可能かを考え、子どもの様子に合わせて取り組む事の出来る内容を考えていく事となった。(しかし、ある程度の目的や内容は考えておこうという事となった。)

- ・保護者へ日々の感謝の気持ちを伝える。
- ・いつも保護者にやってもらうことばかりだが、やってあげる経験をし、喜びを感じる。
- ・クッキングをして、保護者をもてなし、一緒に過ごす事を楽しむ。

この3つの目的を持って取り組んでいく事となった。この時点では具体的に何をするか決めていなかったが、子どもたちが自信をもって出来る事を見せたり、保護者に感謝の気持ちを持って伝わる活動が出来ればよいと考えていた。

(2) きっかけは突然に・・・

8 月の原爆の日に“へいわってすてきだね”という絵本を読む機会があり、読み終わった後に子どもたちと「へいわ」って何だろうという話をしてみた。朝からニュースで見ている子や「昔に爆弾が空から落ちてきてね・・・」という保育士の話を聞いている子もあり、「爆弾が落ちてこない。」「元気いっぱい遊べること。」「美味しいごはんが食べられること。」「綺麗な景色を見ていること」と子どもたちなりに絵本を通して感じた事に合わせて、自分の考えを発言していた。そんな中、K さんの「命を大切にする事」という言葉が出た時、その場にいた保育士全員が驚いた。それと同時に「命」ってなんだろうと不思議に感じている子もあり、「命」についての話になった。「生きてること」「ここ(心臓)にあるやつ」と思い思いに言葉にしていたが、その時は、あまり意見が出ていなかった。正直、「命」についてど

の程度、理解出来て、興味を持てるのかわからなかったが、子どもたちが少しでも「命」というものを知り、考えようとする事は意味があるのではないかと思い、話を続けてみた。予想通り発言する子は少なかったが、子どもたちみんなが初めてのこと（命）を知ろうとする眼差しや考えようとする姿を素敵に感じた。

「命」は生きているという事、みんなも生きていると同じように他にも生きているものがたくさんある事を伝え、考えてもらった。「お家の人」「かまきり」「かたつむり」と次々出てくる子どもたちの意見の中で花や木などの植物は生きているのかという話が出てきた。次々と話が広がり、展開していく様子に子どもたちの“考える力”のパワーを感じた。話が一段落した頃、「みんなが生きていられること、元気でいられる事は誰のおかげだろう。」と投げかけてみた。するとすぐに「お母さんとお父さん」「お家の人」という意見がたくさん出てきた。子どもたちが保護者に見守ってもらえてる事や、一緒にいる事への安心感を自然と感じながら過ごしている事、親のおかげで自分がいるという事を考えられるような気持ちがある事に、保護者の存在の大きさと愛情の大切さを改めて感じられた。子どもたちから保護者に何かしてあげようという思いが出てきて、『お母さんがたちがびっくりする事をしよう』という事になった。

Ⅲ、ぶどう会議

ぶどうのつどいをする事が決まって、内容を決める事になり、子どもたちとの『ぶどうかいぎ』が開かれた。以前からクラスの中でいろいろな事を相談する時は『ぶどうかいぎ』をするようにしてきた。長い時には40分も時間が経っている時もあったが、それでもほとんどの子が真剣に最後まで話をし続けている姿があった。

<1回目>

『お母さんがたちがびっくりする事をしよう。』という考えのもと、子どもたちが意見を出し合っていた。

「お化け屋敷する？」

「迷路は？」

「きらきらのお星様、飾りたい。」

「きらきら、いいなー。」

「プラネタリウムみたいなやつ。」

「あっ。知ってんで。行った事ある。暗くなるとこやんな？」

と、話が膨らんでいく。最終、プラネタリウムのようなきらきら光るものを作る事となったが、どのように光らせるかが難しいという事になった。そんな中、Rくんが「お家に光るお星様のやつあるし、持ってこよーか？」と言い、持ってきてくれる事となった。

<2回目>

Rくんが光る星を持ってきてくれた。みんなで集まり、観察する事となった。Rくんが

「こうやると光んねんで。」と手で暗くして光る様子を伝えと、他の子たちも代わる代わる同じようにして見て驚き、楽しんでた。するとその星は光りを溜めて光るものだという事に気が付き、同じように光るものを作りたいという事となった。子どもたちの強い思いがあったため、光るものは担任が用意する事とした。

<3回目>

光る魔法の粉を見つけたと伝え、子どもたちの前で魔法の粉が光るところを見てもらった。星型に切った画用紙に糊を塗った上に粉を優しくパラパラと撒いて、部屋を暗くするとほんのり緑色に光った。その様子に驚き、興味を持って前のめりになって覗きながら「すげー！」「光ってる。」と目が釘付けになっていた。「やってみたいな。」「早く作りたい。」という気持ちが伝わってきた。その後、子どもたちと一緒に製作する日を決める事が出来た。

<4回目>

以前、お家の人に何かしてあげたいという話をした時に「いつもご飯を作ってもらってるし、自分たちで作ってあげたい。」という意見が多く出ていた事もあり、その事について話をしてみた。すると、目をきらきらと輝かせて、「作りたい。きゃー。」とクッキングをする事に対して、一気にクラスが盛り上がった。子どもたちにとって何かを大人にしてあげるという事がどれほど、楽しみな事なのか伝わる瞬間だった。

次に、何を作るかの話になった。「カレーライス」「ハンバーグ」「オムライス」「ポテトサラダ」「巻き寿司」「焼きそば」と、予想以上にたくさんの料理が出てきて驚いたが、普段からお寿司やさんに行ったり、家庭でも食べる経験があり、一番身近にあったからか巻き寿司を作る事となった。具材はサーモンにマグロ、イカなど次々と寿司ネタが出てきたが、ご飯の事は調理師さんに相談してみようという事になった。(相談役は担任がする事となった。)

<5回目>

調理師さんに相談した結果を伝えた。保育所では、生ものは食べる事が出来ないという事だったため、焼くなど調理して食べる事の出来るものを考えてもらった。たくさん意見が出た中で、たまご、ウィンナー、ツナマヨ、コーンをネタとして出す事となった。この段階から「海苔で巻いていくんやな。」「あぁー。美味しそー。」「今すぐ食べたーい。」と子ども同士で話をしていた。ネタが決まり、次は大切なお店の名前を決める事となった。

- ・すしろー
- ・すしやー
- ・くらずし
- ・ぶどうのおすしやさん
- ・すしやさん

と、子どもたちの意見で全部の意見を合体させてお店の名前にしようという事になった。

「すしろーとくらずしは、お店があるからお店の人に怒られちゃうんちゃう？」という考えも出てきて、ほとんどの子が納得し、それ以外の意見を合体させて考える事になった。(良い、悪いではなく。いろいろな視点から考える子どもの発想は、改めて面白いと感じた。)

結果，“ぶどうすしやー”の名前に決定し，別日に看板作りもする事となった。

IV，造形活動～「お・た・の・し・み。おたのしみ」の呪文～

お家の人を驚かせたい。びっくりさせたい。という思いから，ぶどうのつどいの準備の内容は内緒にしておこうという事になった。「聞かれても『言わへん。』って言う。」「内緒って言う。」という子どもたちが多かったが，「お・た・の・し・み。おたのしみ」という呪文で応える事をみんなで決めていた。朝，顔を合わせるといろいろな子が「お母さんに聞かれたけど，おたのしみって言えたで。内緒に出来たで。」や「お父さんにお菓子あげるからって言われたけど，『おたのしみ』って言ったで。」と嬉しそうに報告してくれる姿が増えてきた。その報告を集まりの時に，子どもたちみんなの前ですると自然と拍手が起こり，「すごいな。Yくん。」という声も聞こえ，仲間との約束とお家の人を驚かせたいという気持ちが子ども同士の中で繋がる感じが感じられた。

（１）きらきら作り

魔法の光る粉を使えるという事で朝から「早く，きらきら作りたいな。」と話している子どもの姿があった。数日前に，タイミング良く科学センターに行く機会があり，その時に見たプラネタリウムが子どもたちの考えていたきらきらのイメージに繋がり，「さそり座いたな」「オリオン座もあったな」「お星様，めっちゃいっぱいやったな。」と楽しそうに会話し，思い出しながらきらきら作りをしている姿があった。白い画用紙に星やハートの型を使い，なぞって綺麗に描こうとする子や形を真似ながら描く子，顔や好きな動物，恐竜を描く子など思い思いの絵を描いて楽しんでおり，すぐに何枚もの形が出来上がっていった。

「ホールに飾るし，いっぱい作らなあかん。」と言いながら，次々と出来上がっていった。2回目の活動では，子どもたちの取り組み方に変化が現れた。1回目には形を描く→魔法の粉を塗る→画用紙を切る，という作業を一人で最後まで繰り返していたが，2回目には子どもだけで役割分担考えて，やりたい作業に分かれて取り組み始めたのである。5歳児らしく『仲間と協力して，一つの活動に取り組む姿』が見られる場面だった。そのおかげで，天井に飾るための透明な幕にきらきを貼り付ける作業もすぐに終わり，全ての作業が3日間で完成した。



（２）メニュー作り

子どもたちが決めた寿司ネタのメニュー作りの活動をした。ひらがなで描かなければいけない活動だった。もちろん、全員がひらがなを書けるわけではなかったが、書けない子は保育士が書いて、周りの絵やテープで飾りつけをする事を楽しんでもらう事を考えていた。しかし、作り始める子どもたちを見ていると「Kくん書けるか。Aが書いてあげようか。」と書けずに困っている姿を見つけて、声をかける姿があった。出来ない事は助け合い、一緒に作ろうとする子どもたちの姿にお互いを認め合える事の素晴らしさが感じられた。

（３）灯籠作り

「とうろう」と聞いてイメージが抱きにくい様子があった。そこで保育士が絵を描いた和紙を筒状にして、実際にその中に蠟燭を入れ、火を灯した。すぐに「うわぁー、きれー。」と優しく柔らかな声が聞こえてきた。自然に揺れ動く火の様子や照らし出された絵に目を奪われ、一瞬だったが、静かな雰囲気にも包まれた。そんな子どもたちの強い興味を持つ姿があったため、すぐに描き始めたり、友達同士で会話を楽しみながら活動に取り組む事に夢中になっている子が多く、白い和紙が子どもたちの絵ですぐに埋まっていた。また、火に照らすと明るい色のほうが綺麗に見えるという事を伝えると、子どもたちは色を考えながら描いたり、明るい色を塗る姿も見られた。



（４）手紙作り

数日前に、マーブリングで染めていた画用紙に手紙を書いた。『おうちの人をびっくりさせるんだ。喜んでもらうんだ。』という思いからか、みんな真剣に紙に向かって描き始めた。メニューの時には字が書けなくて、友達に助けてもらっていた子も今回は、クラスにあるひらがなパズルのひらがな表を持ってきて、横に置きながら形を真似て書く姿がとても印象的だった。自分で書いた文字で思いを伝えたいという思いが非常に強く伝わる瞬間だった。そのため、字を書く事が苦手な子にはすぐに手を貸すのではなく、絵でも気持ちが伝わる事を何度も伝えてみた。するとすぐに手が動き始め、「先生、見て。お母さんとお父さん。」とお家の人の絵を描いて、見せてくれる Y くん、「これ、Mとお母さん、かいたねん。」と嬉しそうに見せる M ちゃんの満足そうな姿を見る事が出来た。様々な思いの詰ま

った32通の手紙は綺麗なりボンで飾り付けされ、棚の上で、当日の出番を待っていた。

V、ぶどうのつどい当日

(1) 目を輝かせながらの登所

朝からやる気に満ちた様子で子どもたちが登所してきた。

「先生、やっと（ぶどうのつどい）今日やな。」「楽しみやな。」と目を輝かせて話す姿と「きゃー、楽しみー。ドキドキする。」と女の子同士で話し合っている横で、「よっしゃー！ やってやんぞー。」と張り切る男の子の姿を見ると、楽しさと一緒に不安や緊張感も伝わってくる姿があった。私は、保護者が来られるまでにする事のリストを画用紙に書いて、終わった項目に笑顔マークを書いた紙を貼り、終わった事と、これからする事が視覚的にも分かりやすいようにしてみた。すると興味を持ってすごい勢いで「最初に何する？」「1番が終わったし、次は2番やな。」と一人ひとりが見通しを持ちながら準備に取り組もうとする姿が見られた。

(2) 部屋の掃除～「ぴかぴかにしよな」～

まずは部屋の掃除をするという事で、大きい棚や絵本棚などの家具は大人が動かそうと予定していたが、やりたい気持ちの強い子どもたちは何人かで集まり、すぐに運び始めた。怪我をしないかという不安もあったが、子どもたちの側について注意の声をかけて一緒に運んだ。子どもたちが手伝ってくれたこともあり、すごい早さであっという間に、部屋にあった玩具や棚類がなくなり、何もない状態になった。その後、すぐに「雑巾がけやな。雑巾持ってこよ。」と次の活動を始めようとする子どもの姿があり、早くも、午前中の活動が終わった。

(3) クッキング活動

午後は楽しみにしている寿司のネタを作るクッキング活動があるという事で、午睡から元気いっぱい起きてきて自分たちでエプロンと三角巾を取り出して準備を始めていた。各食材によって調理するメンバーを事前に決めていた事で、エプロンをつけた子どもたちが声を掛け合いながら、食材ごとにテーブルに集まり始めた。食材が届くと海苔を半分に切るチーム、コーンとツナをマヨネーズで和えるチームなどチーム毎にクッキングが始まっていった。たまごを割って混ぜるチームでは「3回混ぜて、順番っこしよ。」ルールを決めて取り組んでいたり、ウィンナーとたまごを焼くチームでは、菜箸を使う順番を自分たちで相談して決めて、順々に菜箸をまわしながら卵を焼いていた。今までのクッキングで経験した事や、遊びの中での『順番』ということへの意識が感じられた場面でもあった。また、ルールを守る事でみんなが楽しめるという事を自然と取り組んでいる姿に成長を感じた。また、いつもとは違うぶどう組だけの特別な取り組みという事が、より一層、子どもたちの意欲へと繋がっているように感じた。そんな中、突然「おいしくな一れ。もえもえきゅん。」という声が聞こえてきたかと思うと、次第にその声が大きくなり始め、子どもたちみんなでハートの形にした手を焼いている食材に向かって胸から伸ばしていた。その声が止むと、い

つも歌っている『さんぽっぽ』『歌えバンバンバン』などを歌う声が聞こえ、ワクワクしながらウィンナーやたまごが焼けるのを待つ姿があった。完成するとチームのみんなで協力しながら調理した食材を配膳台に運び、嬉しそうに「せんせー！出来た！」と、達成感を感じている満足そうな様子が伺えた。自分たちで考えてきた事が目の前で始まろうとしていることへの期待感や、楽しもうとする様子が強く感じられ、子どもたちが保護者の喜ぶ顔を頭に描きながら楽しめた場面だった。



（４）保護者、来店～「いらっしゃいませ」～

保護者が来店する時間。ぶどう組の前のテラスを入り口にしていたため、入り口で「いらっしゃいませー」と大きな声で保護者の出迎えをする子どもたちの姿があった。保護者の手を取り席まで案内すると、子どもたちが全員、前に並んで「これからぶどう寿司屋を始めます。エイエイオー」と元気に宣言し、ぶどう寿司屋が開店しました。子どもたちは、お寿司屋さんになりきって、手作りのメニューを見せながら、自分のお父さんやお母さんに「どれがいいですか？」「選ぶのは一つだけやで。」「お母さんは卵、好きやんな。」などと言っていた。保護者の希望のネタを聞いてきた子どもたちが、そのことを調理師に伝え、次々とネタをのせてもらったものを巻いていた。ネタがはみ出さないように慎重に巻く子や、早く届けてあげようと少し焦り気味に巻いていく子など、様々な形の巻き寿司が出来上がっていた。落とさないように緊張しながら一つ一つ届ける子どもたちの姿と、届けられた巻き寿司を見て嬉しそうに微笑んでいる保護者の姿がとても温かく感じられた場面だった。「おいしい。」「めっちゃくちゃ、おいしいで。どうやって作ったん。」という何気ない会話のやり取りでさえも、互いに思いやりながら心地良い関係の中で過ごす親子の温かい雰囲気を感じた。



(5)「お・た・の・し・み。おたのしみ。」のはじまり

ぶどう寿司屋が終わった後は、子どもたちが一番「お・た・の・し・み」にしていたホールでの出し物だった。保護者の手を握り締め、ホールまで案内する子どもたちの姿は自信と不安と緊張で胸がいっぱいの様子に見えた。私も、子どもたちが望んでいるように保護者が喜んでくれるだろうか、どんな反応が見れるだろうかと同じ気持ちで案内をしていた。しかし、そんな不安は一気に楽しさと喜びに変わった。保護者がホールの扉を開けると、真っ暗な中に灯籠の小道が現れ、その奥にきらきらと光るプラネタリウムの満開の星が幻想的な世界を創り出し、出迎えてくれていた。すぐに保護者から「うわぁー、綺麗やな。」「お母さん、感動するわ。」「こんなん、いつ作ったん。すごいなあ。」「なんで、光ってんの？不思議～」といろいろな声が聞こえてきたのだ。子どもたちの不安と緊張でいっぱいだった胸の中も青空のように清々しくなった様子で、子どもたちがその隣りで恥ずかしそうにしながらも口元が緩み、満面の笑みで『すごいやろ。』という言葉が今にも出てきそうな表情があった。その姿に私も嬉しくなり、『やったな。大成功やな。』とすぐにでも声をかけたくなった。灯籠の小道を通り、全ての親子がホールに入った時、天井に飾られたきらきらを、座って会話しながら眺める親子、ブラックライトで色鮮やかに光るきらきらの前で写真を取る親子、灯籠の光をゆったりと眺めている親子など、短い時間だったが、親子でほっこりと過ごしながら親子の絆を感じられる時間になった。

最後に、サプライズで用意しておいた手紙を保護者に渡した。渡すタイミングが来るまで、書いた手紙を体の後ろに隠していた子どもたちは、再び、緊張で胸がいっぱいになる一方で、驚かせたい、喜ばせたいという強い思いが最後まで感じられた。「いつもありがとう」という言葉と共に手紙を渡す子やさっきまで笑顔だったのに緊張で渡す前から泣き始める子もいた。「大丈夫！お母さんびっくりするし、絶対に喜んでくれるから。」と肩に手を添えて、軽く背中を押すと、涙を拭きながらお母さんの方へ歩き始め、手紙を渡していた。子どもを膝に乗せて一緒に手紙を読む姿や、子どもが頑張っている様子を見守る保護者の姿があった。読み終えた後に「ありがとう」の言葉と一緒に子どもを抱きしめる姿や、感動で涙を流す保護者の姿に『ぶどうのつどいを取り組むことが出来て良かった。』と強く感じた。保護者に子どもたちの取り組みを気持ちよく受け入れてもらえた事、受け止めてもらえた子どもの表情を見る事が出来た事、そして親子の感動場面を目の前で見る事が出来た事は、子どもと保護者に感謝の思いしかなかった。そんな幸せな雰囲気の中で『ぶどうのつどい』を終わろうとした時、「ちょっと、待ったー！」と保護者の声がホールに響いた。最後の最後に保護者へお願いしていたサプライズだった。何が起きるのか、静かに声の方を見つめる子どもたちの姿があった。保護者に喜んでもらえて、大成功した事に浸りながら、保護者が準備をしている間、「何やろなー。」「どきどきする。」と先程までとは違う楽しみの中



で、保護者からのサプライズを待っていた。サプライズはなんと、花火だった。20 個程の花火が暗い園庭に光輝き、花火を見る子どもたちの笑顔の中でぶどうのつどいは終了した。

VI. 考察

花火を見終わった後、私から保護者への挨拶をさせてもらった。子どもたちと一緒に横一列に並んだまま、取り組みに至ったエピソードや活動の中で子どもたちのやりとりや様子を伝えさせてもらった。私の隣に並んだ子どもたちの横顔を見ながらその話をしていると、『こんな事が出来るようになったんやで。ぶどうぐみのパワーすごいやろ。びっくりしたやろ。』と、その表情から出てくる子どもたちの思いが、私の言葉に乗って保護者に届いているように感じられた。それと同時に、子どもも担任も合わせてクラスが一つになったように感じた。子ども一人ひとりがいろいろな思いを抱きながらも一緒に一つのものを作り上げた事と、やり遂げた達成感に満ちた表情は、また一つ大きく成長したと感じさせられ、胸の奥から熱い思いが込み上げてきた。『お家の人を喜ばせたい。』という思いが、子どもの原動力となり、素直にまっすぐな気持ちで「ありがとう」を伝えられる、それ自体が当たり前ではなく素敵な事だという事を改めて感じさせられた場面だった。

今回、ぶどうのつどいが達成出来た事に子どものパワーを感じられた。反省点や改善点はいくつかあったものの、子どもと保護者が一対一で向き合い、一緒に過ごす特別な時間になったこと、子どもたちが日頃してもらって当たり前だと思っていることに感謝の気持ちを抱き、感謝の気持ちを伝える事が出来たことは、とても良い取り組みになった。私は取り組みの中で自分たちで考えて取り組もうとする自発性と積極性、そして仲間を意識し、一緒に考え、協力し合いながら一つのものを作り上げていく事の楽しさと協調性を大切にしてきた。また、『ぶどうかいぎ』では、考える力、そして、考えたことを発信する力、他を認め、自分を認めてもらえる雰囲気づくりを大切にしてきた。担任間で上記の内容を確認し合い、その思いを大切に活動に取り組み、子どもと関われるように意識してきた。同じ思いで関わる事が出来たからだろうか、子どもたちが活動の中で自然と、育って欲しい力を発揮する姿が見られた。

『ぶどうかいぎ』で自由に発言し、仲間の意見を受け入れようとする姿は、お店の名前を決める時の合体案からも感じられた。そしてきらきらづくりで自ら役割分担を考え、役割ごとに作業をこなしていく姿や、メニュー作りで友達にひらがなを教えたり、書いてあげる姿も、子ども同士の関わりの中で見る事が出来た。仲間と意見を出し合うことの楽しさや、自分たちが考えた事が出来上がっていく達成感は、より良いものにしていこうとする探求心に繋がっていくと考える。「命」から広がっていった今回の取り組みは、改めて日頃、お家の人にやってもらっている事への感謝の気持ちを抱くようになり、「産んでくれてありがとう。」という思いまで出てくるようになるなど、豊かな感性を育むこととなった。そのような姿を見る事が出来たのは、私達保育士の中でも保育士のねらいと思いをはっきりと持ち、ねらいや目的を明確にして、子どもたちと共有する事で、子どもも担任も同じ思いで取り組

む事が出来たからだと思う。保育士の思いが先行していた場面もあったに違いない。しかし、子どもの姿や思いに合わせながら活動を進め、無理強いする事のない言葉掛けが出来た事は大きく関係していると思う。また、クラス内だけでなく、職員や調理師の協力もあり、『ぶどうのつどい』を成功させる事が出来た。そして何より、保護者の方々が当日まで子どもたちを温かく見守り、『おたのしみ』の呪文を受け入れて、一緒に楽しんでくれた事は成功に繋がる一つの大きいものだったと思う。日々の姿を伝える公開日誌に加え、日々の会話の中で様子を伝える事や、クラスだよりでの活動内容と保育士の思いの発信が保護者の理解に繋がったのだと思う。

行事の取り組みだけでなく、日々の保育の中でも子ども一人ひとりの思いを大切に、寄り添いながら、子どもが興味を持って自発的に考え、行動出来る活動を保障していきたいと思う。

子ども一人ひとりの思いが尊重され、様々な場面で子どもの力が発揮されるような保育を考えていきたいと思う。そして、子どもだけでなく、保護者と共に保育所全体で楽しめるクラスづくりと保育所づくりに励んでいきたいと思う。